

三つのお題

畠谷 羊

かまぼこ、京都御所、一万円札

明日返す、明日返すと言って、すでに二週間が過ぎた。その気がないわけではないが、ない袖は振れない、返せない金は返せない。決して贅沢はしていない。今日の昼飯も、家に残っていたチョコチップスティックパンを三本食べたきりだ、つらい。

金を返してもらえないのも辛いだろうが、返したくても返せない私の方がもっとつらい。端た金もないこの身の情けなさもさることながら、催促する相手の心持もさぞつらかろうと思う私の心がつらい。つまり私の方がもっとつらいのだ。

昔の作家なんかだと、家の本や衣類を質に入れて金を作っている。自分も見習いたいとは思うが、家に所蔵している小説や漫画はまた読みたくなるかもしれないし、読みたくなったときにもう一度買い戻すことを思うと不経済だ。だから売らない。衣類を売りたいのは山々だが、私の着ているこの服を売ってしまっては、明日着る服がない、そもそもこんなボロ雑巾同然に擦り切れたズボンや、色褪せてしまったシャツを売ったところで、それらを売りに行くカロリ一分も稼げやしない。

思案にくれて、私はベッドに寝転んだまま、天井を見上げた。金がない、つらい、金がない、つらい、金が…。呪詛のように呟いていても金は降ってこない。金が…。

不意にドアホンが鳴った、ピンポンと。あんまり気ふさぎなので、一瞬やり過ごそうかと思ったが、もしかしたら宅配便で何か送られてきたのかもしれない、と思って、立ち上がり、ズボンを穿いて、玄関へ向かう。がちゃり、お届けものです、こちらにサインを、……はいはい、どうも一、がちゃり。

僕倖である。小包ながら、ずつしりとした重みがある。送り主は実家の祖母だ。困窮にあえぐ孫を見かねて、これはもしかしたら金塊か、あるいは金目のもの、悪くとも高級食材だろうと踏んだ。小包を開ける。

「先日、北陸へ行つきました。そのお土産です。」という荒れ狂う日本海の写真のポストカードと共に詰められていたのは、ちくわ、かまぼこ、はんぺんなど練り物詰め合わせだった。ばあちゃん…。せめてこれが、せめてレトルトカレーであつたら立派な食事だった。なんなら米でもよかつた。よりもよつて練り物。ばあちゃんの優しさが感じられるだけに、もしかしたらと期待しただけに、ただただ悲しい、辛い。

包みの中から、かまぼこをひとつ、とりだした。かまぼこ、大変立派なかまぼこである。お正月に並ぶような、ペラペラで、けばけばしい着色をされたものではなく、いかにも自然本来の素材を活かしたルックス。おそらく豊かな海の幸のうまみやコク、まろやかさ、香りが凝縮されているのだろう。

でも、かまぼこである。ばあちゃんの優しさと、海の幸が凝縮されているといえど、かまぼこである。これを腹いっぱい食べて胃袋を満たす気にはなれない。かまぼこを握りしめて、今夜は泣こう。金は明日返そう。

そう思った矢先である。不意にドアホンがなった。日に二度も来客があるのは珍しい、もしかしてまた小包が届くのではないだろうか。今度こそ何か金目のもの、あるいは…。

がちやり。

「遠藤、金返せよ」

しまった。何のために携帯の電源を切っていたのだ私は。練り物に心を折られた私はついつかりドアスコープも覗かず、債権者を家に招き入れてしまった。かまぼこを握りしめて立ち尽くす。

「どうしたんだよ、明日返すって言ってたろ」

「そうそう、そうなんだよ。悪いね、わざわざ来てもらって、ささ、上がりなよ」

「いいよそんなの、金返してもらつたらすぐ帰るからよ」

「遠慮すんなよ、上がりなって。金貸したお礼にさ、……かまぼこご馳走するから」

そういうて私は握りしめていたかまぼこを見せる。一瞬不思議そうな顔をしたもののか、美味しいのか？と言いながら靴を脱いでいた。

切るからこっちで待っていてくれよ、と散らばった衣類を足で蹴飛ばして、人ひとり分のスペースを開ける。漫画も読んでいいからさ、ちょっとくつろぎなよ、と私の愛蔵書も積み上げる。お、これ読んだことねえな、手に取った。

私はかまぼこを持ったまま台所へ立って包丁を取り出す……振りをして、息を殺し、玄関の方へ歩く。大丈夫だ、あいつはまだ漫画を読んでいる。スリッパに足を突っ掛ける……。気付かれないように玄関のノブに手をかける……。ギリギリすり抜けられる分だけドアを開ける……。あいつはまだ漫画を読んでいる……。

逃げなくては。私はマンションの階段を下りた。とにかくこの場をやり過ごさなくてはいけない。自転車の鍵は部屋に置いてきてしまった。仕方ないので小走りでマンションを後にした。かまぼこは握りしめたままである。

木を隠すには森、という。電車賃がもったいないので、繁華街に出る気はしない。歩くことのできる圏内で、人の多いところといえばやはり大学だ。平日昼間、勉強くらいしかすることのない無目的なアホどもがうようよと出てきていることだろう。

小走りをキープしたまま、学校へ向かう。あいつはまだ漫画を読んでいるだろうか。いや、私のコレクションが魅力的とはいえ、いくらなんでもかまぼこを切るのに時間がかかりすぎている、きっと気付いて私を追ってくるだろう。だが大学に入ってしまえばこちらのものである、広い学び舎ではないが、人に紛れればまず見つからないだろう。

私は校舎裏の喫煙所で一息ついていた。近頃は感心なものでタバコを吸う学生は少ない。校舎の影になった喫煙所はひっそりと静かだ。おまけにあいつはタバコを吸わない。こうした喫煙所の存在すら知らないだろう。ポケットの中でくしゃくしゃになっていたタバコをふかしながら、とりあえず時間が過ぎるのを待つことにした。

二本目を吸おうと、くしゃくしゃのタバコを整形していると、誰か来た、一瞬警戒したが、あいつではない。同じ学科の友人だった。私は安心しきっておおい、タバコくれよと手を振った。油断していた。

友人は私の姿を認めるとすぐに携帯を取り出し、誰かに電話はじめた。ん、どうしたんだ

ろう、くらいにしか思わなかつたのだが。次の言葉を聞いて血の気が引いた。

「おい、遠藤いたぞ、……うん、校舎裏の喫煙所、……うん、…うん」

てめえ裏切つたなと声を荒げたが、喧嘩をしている場合ではない一刻も早くこの場を去らなくては。まだ火をつける前のタバコは足元に捨て、友人と反対方向へ逃げ去ろうとした。

「なに持つてんの？」

友人は私の左手をみている。ばあちゃんのかまぼこである。

「なにって！かまぼこだろ！みりや分かんだろうか！」

「いや、だからなんでかまぼこなんか持つて歩いてんだよ」

「うるせえ、お前に関係ねえだろ！理由なんて教えてやるもんかよ！」

「ふーん、……お前そのうまそうなかまぼこくれたら、あいつに嘘を教えてやってもいいけどな」

嘘？あいつに？

「だから、あいつに、京都駅ぐらいまで逃げた、って言ってやるよ。そうしたらお前はそこの御所の森にでも隠れていやいい。さすがに諦めるだろうよ」

なんという僥倖。おばあちゃんありがとう、おばあちゃん僥倖。かまぼこを握りしめて家を出て正解だったのである。私はおばあちゃんに感謝しつつ、友人にかまぼこを手渡しつつ、

「このかまぼこは由緒あるかまぼこで、普通のルートではまず手に入らない。私は何かあった場合はこのかまぼこを現金化して債務を完済しようと思っていた。つまりそのくらい高価かつ流動性の高い資産である。もちろん味は無類。友よ、約束を頼むぞ」

と言い捨てて、一目散に御所へ向かった。

御所の茂みに隠れながら、私は何度も何度もばあちゃんへの感謝の言葉を漏らした。ばあちゃんありがとう、ばあちゃん孫思い、ばあちゃん海の幸……。日が暮れるまでここでぼんやりしていれば、とりあえず今日のところはしのげる。今日のところをしのければ、あと数日はしのげる。あと数日あれば金などすぐに作れるだろうと思っていた。ばあちゃんありがとう。

不意に頭の上から声がした。

「観念しろ、遠藤」

見上げると恐ろしい顔をしたあいつと目が合う、合うやいなや私はとつ捕まえられてしまったのだ。どうして、こんなはずでは、友人にはばあちゃん印のかまぼこを与えて手なずけたはずだ。

「なぜここがバレた、お前は京都駅でアホな顔をして観光客に揉まれているはずじゃなかったのか」

「そのつもりだったみたいだな」

私を組み伏せながら電話をかけている。

「おう、俺だ……いたよ、確かにいた。お前の言う通りだったよ、ありがとうな」

まちがいない、友人が私を売ったのだ。なんという裏切り。たしかにかまぼこをくれてやったはずである。それなのに私を裏切つたのか、私にはまだばあちゃんの練り物がたくさんある、そ

の一つだってくれてやるもんか。そう言ってやりたかった。

「どうか後生だ、友人に一言言つてやりたいので電話を変わってくれ」

「しょうがねえなあ」

私は腕をねじあげられたまま、耳元に電話を近づけてもらった

「私だ！よくも裏切ったな！かまぼこまでくれてやったのに！」

「あー、すまんね、状況が変わったんだ」

「状況！あんなに高価なかまぼこをくれてやったのに状況もクソもあるか！」

「それがさー、お前がくれたかまぼこと同じくらい美味そうな練り物を、そいつがいっぱい持つてたんだわ。おれ、練り物に目がなくってねー、そういうわけだからごめんよ」

そう言い残して電話は切れた。

なんということだ、すでにはあちゃんの練り物は悪の手に渡っていたのか。この世に正義はないのか、神は死んでしまったのか。

がっくりうなだれる私の尻ポケットから財布が抜かれ、中身を検分された。

「お前、金がないなんて嘘つきやがって、あるじゃねえか」

私の財布から一万円札が抜かれる。

「まってくれ、後生だ、ほんと、マジ後生だから、私はそれで彼女にプレゼントの指輪を買わなくてはならないのだ。そうしなくては身の破滅なのだ」

私の必死の訴えに、鼻を鳴らしながら、

「指輪か、そんじゃこいつでも指にはめてもらえよ」

這いつくばる私の目の前に、ちくわがなげられた。

遠足、スペアキー、ハイヒール

遠足、スペアキー、ハイヒール

一完璧な遠足というものは存在しないの、完璧な絶望が存在しないように。

これが僕の記憶の中で最も古い、彼女の言葉だ。彼女は公平にいって、決して美人ではないが、僕の記憶の中ではいつだって、冬の化粧品売り場のような厳しさと華やかさをまとっている。そういうある種の人に備わっている「尊厳」というものは、一般的な美しさとか愛らしさだとかの尺度に収まるものではないのだ、はつきりといって。

僕の事務所での一連のゴタゴタが、一応の解決を見せた五月の終わり、彼女から手紙が届いていた。緑色の封筒に赤いマジックペンで、僕のマンションの住所と名前が書かれていた。送り主の名前はなかった。

それがどうして、すぐに彼女からの手紙だとわかったか、理由は僕のために添えられているはずの「さま」という二文字の平仮名にあった。ふつうの人は「さま」の「さ」の字は、三画で書く。僕が今まで出会った人物の中で、ただ一人彼女だけが、二画目と三画目をつなげて書く。今まで一度もそんなこと気にしたことはなかったのに、僕はその字を見た瞬間に彼女のことを強烈に思い出したのだ。

スパゲッティをゆでるあいだの時間に、その手紙を読もうかとも思ったが、後からでも問題ないと考え、僕はスパゲッティを中断することはしなかった。なぜなら手紙を送るのは完全に彼女の都合だが、目の前のスパゲッティは僕自身の問題だったからだ。

封筒の中には真っ赤な便箋が入っていた。

「あの日のハイヒールを探している」緑色のマジックペンでそう書かれているだけだった。結局スパゲッティをすすりながらその手紙を読み、僕はその手紙の意味を何度も考えた。

あの日のハイヒール？

その言葉に僕は全く身に覚えがなかった。もちろん、彼女の雰囲気とハイヒール（たとえばシックな藍色、ヒールの部分は黒だ）を結び付けて考えるのは容易だし、靴を蒐集するのが好きな女性を僕は何人も知っている。でも「あの日の」と限定されているハイヒールは、そういう一般的な想像の産物ではなく、何かしら手紙の送り主にとって（そして手紙の受取人にとって）重要な意味を持つハイヒールだ。

あの日のハイヒール。

手紙には、たしかにそう書かれていた。

学生の頃の僕は、お金がもらえるのならどんな仕事でもやった。自転車のサビ磨き、大型犬の散歩、立ち飲み屋のバーテン、ネットサーバーのメンテナンス……。そのお金で大学の学費を払い、下宿の家賃を払い、本を買い、そしてときどきどこかへ旅行に出かけた。だから僕には学校へ行っている暇なんてなかったのだ。

彼女と初めて出会ったのは、自動販売機を点検するアルバイトをしていたときだった。一日で百台所くらいの自動販売機をめぐり、一台ずつ、商品が売り切れになっていないか、破損がないか、いたずらをされていないか、ゴミ箱がいっぱいになっていないか……一台ずつ点検をしていくのだ。

彼女と初めて出会ったのは、そうした点検のアルバイトの途中だった。小さな公園の前の自動販売機を、いつものように点検をしていると、彼女は「こまつたな、故障ですか」と僕に声をかけてきたのだ。

「いえ、点検をしているだけですよ。あつたかいコーラが出てこないようですね」

「そう？ よかった。でもわたし、あつたかいコーラ、好きよ」

そう言って彼女は、言いようもなく下手糞な絵を見せられた小学校の先生みたいにして笑った。僕はその笑い方から、彼女は自分よりいくつか年上だと思い込んだ。

そのまま、どういうわけか、彼女は「ごくろうさま」と僕にあたたかい缶コーヒーをおごってくれて（そして缶コーヒーは土から掘り起こしてきたんじゃないかというくらいに不味くて）、立ち話をしながら、自分たちが同じ学校に通う学生で、しかも同級生であることが分かった。彼女は年上などではなかつたのだ。

その日はそれきりで、僕らは別れた。

「観光学を勉強しているの」

「観光学？」

ふたたび僕らが出会ったのは春学期の最終講義の日だった。学校は通わなくとも、単位を取らなければ学費を納めている意味がないので、僕はいやいやながら学校へ行き、試験範囲やレポートの提出条件を聞いて回っているころだった。学校で偶然彼女に出くわしたのだ。

立ち話から、彼女のとっている講義と、僕のとっている講義がいくつか重なっていることがわかり、彼女にノートや参考文献などを貸してもらえることになった。

「観光学っていうのは……そうね、小さい頃遠足行ったでしょう？」

「うん、同じ帽子をかぶって、二列になってえんえんと歩かされたな。行き先はボルネオ島だったかな」

彼女のおかげでいくつかの単位を取り、僕自身と学校のせいでいくつかの単位を落とした。そのお礼に、その夜僕は彼女を食事に招待した。

「ふざけないで。わたしは真面目に勉強してるの」

「ごめん、僕なりのユーモアなんだ」

彼女はカルフォルニア・ワインを一口飲んだ。

「でね、……もう、言いたいこと忘れちゃったじゃない。」

「悪かったよ」

「とにかく、よりよい遠足のために、大人たちが一生懸命考えてるの、観光学では。行き先や、方法や、食べ物や、天気や」

「お酒と、そこで出会う人もね」

「そう。よりよい遠足を求めて、私たちは日夜日の当らない研究室でじつと考えてるの。」

その後、僕は彼女となんか食事し、それよりやや少ない回数を一緒に寝た。そんな関係は、夏休みが過ぎ、秋学期が過ぎ、春休みが過ぎ、もういちど春が戻ってくるころまで続いた。

生ぬるい雨が過ぎていった、深夜のことだった。

「返すわ」そう言って、先に服を着た彼女は、鞄の中からスペアキーを出して、ベッドで寝ている僕のお腹のあたりへ放り投げた。

「どうしたの？」

「わたし、遠くへ行くの」

とおくへいくの、僕にはその言葉自体がなんだか、とおくの後ろの方から聞こえてくるようだった。

「どうしたの、急に。学校は？」

「つまらないこと聞かないでよ。」彼女はテーブルの上の気の抜けたビールをグッと喉を鳴らして飲んだ。「あなただって、学校はどうするの？」

全く正論だ。僕は相変わらず学校へも行かず、アルバイトをしたり、映画を見たり、彼女と寝たりしているだけだった。

「学校は休学するわ、手続きは済ませてあるから」

「どこへ行くの？」

「遠くよ。それ以上聞かないで」

テーブルの上に散らばっている、マスカラやら眉を描くペンやらを鞄に詰め込みながらめんどくさそうに彼女は言った。

「どうして急に？」

「急に？」彼女の手がとまった。「あなた、よくそんなこと言えるわね」

どういうことだろう、僕はすっかりめんくらってしまった。以前からそんな話をしていたというのだろうか。そもそも僕らは普段どんな会話をしていたのだろう。

「もう嫌になったのよ、あなたも、この部屋も、この街も。嫌なのよ、空っぽで。わたしも、あなたもこの街にいないのよ、空っぽなのよ。そりや全て満たされるなんて無理な話だわ、でも嫌なのよわたしは……」

そういうて彼女は泣き崩れた。僕にはなにがなにやらさっぱり分からなかった。そして彼女はこの部屋から出て行ったのだ。港みたいな匂いのする、雨が過ぎて行った深夜のことだった。

それ以来一度も彼女には会っていないし、連絡もとっていない。なにしろ彼女は「遠くへ」行ってしまったのだ、連絡を取ろうにも無理だ。「遠く宛」で手紙は届かない。

ここまで考えて、僕はふと気付いた。彼女はどうやって、僕のこの住所へ手紙を出したのだろう。たしかに事務所を開いているから、僕の所在は調べればわかる。だけれども、この自宅の住所は公開していなかつたはずだ。じゃあ彼女はどうして。

不思議な気分になって、僕は押し入れのダンボールをひっぱりだした。あの日彼女が投げてよこした「スペアキー」が急に気になったのだ。ダンボールの中の小さな箱に、いろんな小さなガ

ラクタといつしょに、そのスペアキーはあった。

スペアキーは小さな鈴のついた、どこかのドレッシング会社のキャラクターのキーholderにぶら下がっていた。そしてその時初めて、僕は一緒に小さな鍵がもうひとつぶら下がっていることに気付いたのだ。

やれやれ、僕はため息をついた。あの日のハイヒールを探す遠足に出かけなくっちゃいけないらしい。